

関根さんに聞いたかったこと

柳幸典

学生の頃に最も衝撃を受けた作品の一つが関根伸夫の「位相—大地」だった。なんと豪快で潔い作品であろう、と。もちろん1959年生まれの私は写真でしか観てはいないが、当時の旧態然とした日本の美術大学の授業に反抗的な態度をとっていた迷える青年にアートの醍醐味と勇気を与えてくれたことは確かだ。そして作家活動を始めるとあってなんとかあの超弩級の「位相—大地」に挑まなくてはならないと心に決めた。私がとった戦略は大地を転位させること。社会的・政治的存在としての大地を移動させることだった。球体という移動可能な形態の土玉をスカラベ・スカラよろしく美術館に転がして行ったり、一転して軽々とヘリウムガスで浮遊させたり、と。そんな時、吉祥寺の画廊での私の展覧会に関根さんがふらりと現れた。はたして私の密かな挑戦をどのように思われたのかストレートには聞けなかったが、ある雑誌に私が書いた文章を読んでいただいていたことがすごく嬉しかったことを特に記憶している。「もの派」への私の理解は、物そのものから社会性や機能を剥奪して最小限の人為を加えて投げ出すことにより多義的な解釈を生み出す行為と捉えている。そこにメッセージなどは無いむしろ不純な要素として捉えられる。同じ大地に関わった作品として、その相違が関根さんとの議題になったように微かに記憶している。前衛芸術家も動員された国策とも言える1970年の大阪万博のきらびやかな祭典の片隅で「位相—大地」が再制作されたことには、解釈をモノとともに投げ出すが故に、制作者の意図を離れて今となっては十分に社会的メッセージを現代に発し続けているのではないかと私は思っている。お会いした時からずいぶんと経った今、あらためてこの点をお話しする機会があったなら、関根さんは何と答えただろう。

2020年5月2日